

編集部が迫る!



発達保障って なんですか?!

夜明けの海へ
船出するようないいで

私が「発達保障」「発達の権利」「発達権の保障」という言葉とその考え方について、初めて識ったのは、1966年の夏、田中昌人（敬称略）によってです。それは、田中、藤本文朗、清水、永田一視が呼びかけて京都で開かれた「心身障害児教育研究運動をすすめる会・第一回世話人合宿会」（66・7・30〜31）、日教組主催の「第七回全国寮母大会」（同・8・1〜3）での田中の報告と講演を通してです。

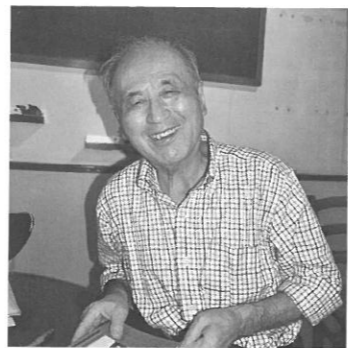
田中は「発達しないといわれる障害児の発達にとりくみ、そこでえられたことをもって幼児などの発達をみなおすことによって、発達の理解のしかたをかえなければならぬことがわかってきた」として、「新しい発達理解」のしかたを、発達を保障する教育実践のあり方、さらには自由権、社会権につづく発達権の位置づけなどについて提起しました。3時間近くにおよぶ迫真の力が漲る報告でした。用いている言葉は、例えば「変革操作特性の高次化」、「変革操作特性の交換性を志向的に高める」など、独自性を有し難解でした。しかし、その発達保障論の全体に

貫かれている主張、すなわち、①それらの用語は新しい人間発達の理論の核心となる概念を言い表すために不可欠である、②その理論は近江学園や地域における発達保障の実践による知的障害児・乳幼児の発達の事実に基づいている、③重症児を含め全ての人間の発達の基本的すじみちは共通であり、そこに人權の無差別平等性の論拠がある、④発達は権利である、⑤誰もが通ってきた発達の質的な転換期におけるいわば「もつれ」に、より強く、長く直面しているのが障害がある人たちであり、発達保障の密度と手だてをいっそう濃く、豊かにしていかなばならない、⑥発達のどの段階も同価値である、等々に私たちは新鮮な共感を覚え、強い励ましを受けました。この「合宿会」は最終日に「全国障害児（者）教育研究会」（全・障・研）結成準備合宿研究会と改称し、「第二回障害児（者）教育研究集会」（66・12・27〜28日、東京）を開催しました。この集会での発表・討議の成果が大きな力となって、今日の「すべての障害者の権利を守り、発達を保障すること」をめざす自主的・民主的研究運動団体としての全障研は1967年8月1〜3日に結成大会を開きました。

結成大会の基調報告案作成には結成準備会の近畿ブロックがあったりしました。基調報告は、「わたしたちは、権利をかちとるたたいのなかで発達を正しく保障する実践理論を討議しはじめました。」として、「発達」は「主体的に外界にとりくみ、外界を変革していく過程」であり、しかも「獲得した操作のしかたが高次化するというひとつの方向へのびるだけではなく、獲得した操作のしかたを、志向的に、豊かな自由度をもって高めていく、いわばヨコへの発達を必然的に内包」しており、それは「他の人との創造的連帯の中で、差別にむかって、矛盾をきりひらき、解放をかちとっていく主体的なたたかいたという実践例」も出されてきていることなどを述べています。

ここではまだ発達保障論の基本となる人間発達の理論のキーワードを平明な用語に置き換えている面と、その概念が抽象的な説明にとどまっている面とが混在しています。しかし、全体として障害者の「人權保障」と「発達保障」を不可分のものとして結びつけ、統一して実現していこうという基調は参加者に勇気と希望を与えました。結成大会の最終日の総会で、委員長に田中昌人、全国事務局長に

清水 寛さん



しみず ひろし

1936年東京生まれ。東京教育大学教育学部特殊教育学科卒業。全障研第二代委員長、顧問。埼玉大学名誉教授。著書に『発達保障思想の形成』（青木書店）、『セガン知的障害教育・福祉の源流』全4巻（編者、日本図書センター）、『日本帝国陸軍と精神障害兵士』（編者、不二出版）など多数。

清水が選出されました。私は大学院生でしたが、一年半にわたり〈全障研〉結成準備会委員長をさせていただき、研究者としての人格的自律と社会的自立をめざしていたので、発足した全国障害者問題研究会とともに歩むことは、あたかも夜明けの大海原に全国の仲間たちと力を合わせて船をこぎ船出していくような思いでした。

私は大学（東京教育大学）では、特殊教育学科に在籍していたのですが、将来、特殊教育への道に進む希望をもてず、3年生（22

歳）の夏休みに近江学園を訪問し（58・8・9〜10）、糸賀一雄園長、岡崎英彦医師、田中昌人研究室主任（26歳）にお会いして、その悩みを聞いていただき、その後の生き方を導かれました。それだけに、田中委員長と全障研運動にたずさわることは無情の喜びでした。

このように、製作と上映活動とが全障研の組織化と軌を一にしており、映画の内容も重症児施設の厳しい現状のなかで陥りがちな指導の誤りや職種間での園児の処遇をめぐる意見の対立などもありのままに映し出しながら、障碍の重い子どもの極微な発達の世界にみられる人間発達の確かな道筋を子どもの側に立ってリアルに指し示し、発達保障の思想と実践に限りなく豊かな示唆を与えるものとなつていきます。そのため、全障研の全国の支部、サークルづくりをはじめ、障碍者問題に関心を寄せる人びとに計り知れない影響を与えていきました。私も幾度も、何年にもわたって多くの人たちと共に観、学び続けてきました。

が石運びの作業をするシーンのときでした。田中が、石運び作業を使役労働ではなく発達を保障するための教育的労働にしていくなために子どもの発達の段階にそくし、創意工夫をこらしてとりくみ、二人の園児が、石は運ばなくても、人間関係を運ぶ。に至った過程と、そのときの自分の心境を子どもたちから学んだことを通して生き生きと語っていた姿が強く印象に残っています。

重症心身障害児療育記録映画「夜明け前の子どもたち」（監修・

と共に



（撮影者 東京総合写真専門学校 原 一男氏）

58・8・9〜10、大学3年生の時、近江学園を訪ね、その別れ際に職員や園生たちと。前列左端・田中昌人研究室主任、後列中央・清水寛

〈全障研〉結成準備委員会主催「第二回障害児（者）教育研究集会」（66・12・27〜28、東京）での清水準備委員長の情勢報告。出典：「全障研」結成準備委員会「新しい障害児教育の理論と実践―差別を克服し教育権をかちとるために―」（67・1）

30時間のフィルム、250時間のテープを2時間のドキュメンタリー作品に編集中の青山のスタジオに田中に誘われて出向き、田中がナレーションを吹き込むのに立ち会いました。ちょうど、第二びわこ学園に小さなプールを造るために近くの川原で職員と園児たち

今もなお発達保障の思想と実践の深化、発展に寄与する不朽のドキュメンタリー映画です。